

予想を上回った大雨 ～2026年7月17・18日 栃木・群馬の大雨～

VOL.22[2026.8]

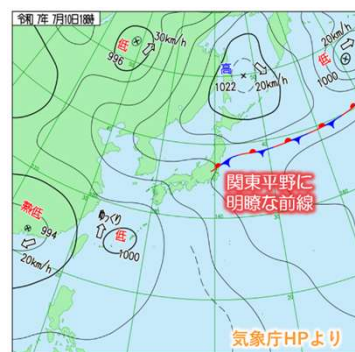
2026年は、6月から7月上旬にかけてオホーツク海高気圧が強く張り出しました。日本列島には涼しい空気が流れ込み、曇りや雨のぐずついた日が続く、梅雨らしい梅雨となりました。そして、梅雨明け後は一転、厳しい猛暑が訪れました。6月の段階から異常な猛暑が展開された過去3年間（2023～2025年）とは大きく異なり、今年の夏は、季節が順を追って移ろう日本本来の季節循環を取り戻しつつあるように思います。

2026年7月17日の夕刻から18日の早朝にかけて、関東平野では栃木県や群馬県を中心に局所的な大雨となりました。アメダスでは、群馬県桐生市で17日22時23分に1時間降水量72.5mm、栃木県足利市で18日2時20分に12時間降水量232.5mmを観測し、いずれも当地の史上1位を記録しました。被害も相次ぎ、群馬県前橋市では橋が崩落、太田市では道路が冠水しました。さらに栃木県足利市では、土砂崩れにより家屋が倒壊し、2名の尊い人命が失われる災害となりました。ニュースや報道で繰り返し伝えられたのは、当初の予想を上回る雨が降ったことです。なぜ大雨を予想できなかったのでしょうか。昨年2025年7月に関東で発生した、同様の局所的な大雨の観測事例と比較すると、その一因が見えてきました。

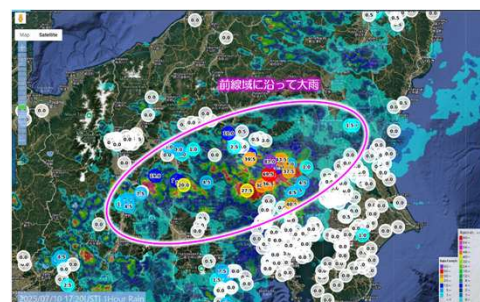
観測史上最高の猛暑となった2025年の夏は、3ヶ月以上に及ぶ長い猛暑期間の中で、冷気が流れ込む隙がわずか2回しかなかったとされます。その1回目も7月10～12日頃です。ほんの一時的にオホーツク海高気圧が強まり、冷気と暖気を分ける前線が関東まで南下してきました【図1】。前線の境目で大気不安定となり局所的な大雨となりました。その様子は、POTEKA NETの観測でも捉えられました。細かく見ると、局所的とはいえ、大雨は地上天気図の前線に沿って観測されていたことがわかります【図2】。

一方、本年7月の大雨は、関東の梅雨が終わりを迎え、南からの暖湿気流が強く入り始めた時期に発生しました。7月17日の地上天気図を【図3】に示します。南北に並ぶ等圧線に沿って暖湿気流が流れ込むため、関東平野が全般的に大気不安定となることまでは予想できます。しかし、昨年7月のような明瞭な前線は存在せず、どこで何が起ころのかかわからない状況でした。続いて、同じ7月17日のPOTEKA NETを【図4】に示します。気象庁のCバンド雨雲レーダーでも、POTEKAの地上観測でも、複数のエリアで局所的な大雨が発生したことが捉えられました。一本の前線ラインに沿って大雨エリアが集中していた昨年の事例とは、まったく異なる姿です。

近年の高度な数値予報技術をもってすれば、前線のように明瞭な降水域が識別できる状況で予想降水量を見積もることは、難しくないと思われます。しかし、降水の起因となる上昇気流がどこで発生するのかわからない状況では、降水量の予想は難しいのかもしれませんが。予想の困難な状況だからこそ、どこで大雨が降り出しているのかを精確に捉えることが、防災の要となります。稠密な地上気象観測技術があれば、それを実現できる可能性があり、こうした観測網が日本全国へ広く展開されることを切に願います。



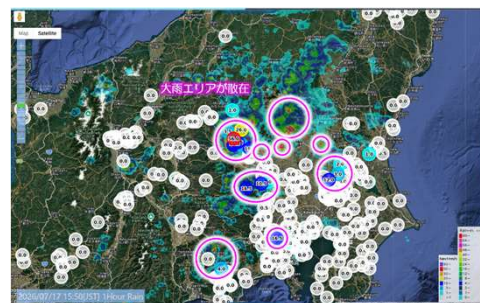
【図1】2025年7月10日18時天気図



【図2】2025年7月10日17:20POTEKA NET降水量



【図3】2026年7月17日18時天気図



【図4】2026年7月17日15:50POTEKA NET降水量